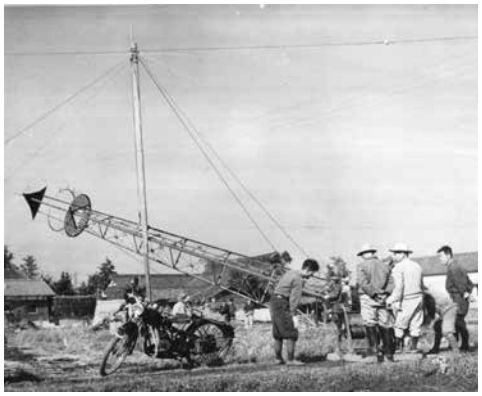
今は昔…まちの安全・安心を見守る「火の見櫓」

歴史を辿る

火の見櫓は、江戸時代の公設消防にあたる武家が組織した定火消が、任務のため詰める火消屋敷に建てられたのが始まりとされています。また、町人による消防組織である町火消も、定火消の櫓よりは制限があるものの、火の見櫓を設けたり、屋根の上に梯子を立てて半鐘を吊したりしていました。火災が発生すると火の見櫓の半鐘を鳴らして住民に知らせていました。



▲昭和30年頃　秋田・火の見櫓の建設

明治時代になり、現在の消防署や消防団にあたる組織が整えられていくと、都市部には火の見櫓の設置が進められました。この頃は木造でしたが、大正期に入ると鉄骨造りが登場し、昭和期には都市部から周辺地域へと建てられていきました。しかし、アジア・太平洋戦争が始まると、鉄骨造りのものは取り壊されました。

戦後になり、消防団が全国で組織されていくのにあわせ、昭和20年代後半から30年代に鉄骨造りの火の見櫓が建てられていきます。大口町内でも昭和20年代後半から40年代にかけて、各地区で寄贈を受けたり寄付を募ったりして、再建もしくは新しく建てられていきました。

その後、時代の進展とともに、火の見櫓よりも高い建物が立ち並び、櫓の上から地区内を見渡すことが難しくなりました。また、火災の際は、電話や防火設備による通報が当たり前となり、火災をはじめとした防災に関する伝達手段も、行政防災無線の登場で、火の見櫓本来の役割は、新しい技術へと移り変わっていきました。

大口町の「火の見櫓」

時代が移り変わり、全国的に「火の見櫓」はその役割、機能を終え、今では随分と見かけなくなりました。しかし町内には、10基の火の見櫓が残っています。そして、その「火の見櫓」の多くは、昭和30年代に建造されてきたと思われ、今や60余年が経過しています。

「生立ち」は定かではありませんが、当時、各地域が寄付などの財源を集め、地域のシンボルとして、また地域の安全のために建造されたものだと思われます。火の見櫓は、地域の自主防災組織が主体となった防災施設であるとともにコミュニティの安全の見張役でもあり、危機と注意を半鐘の音で知らせてきました。「火の見櫓」はまさしく「コミュニティを守るもの」…そのものだったと思われます。

その火の見櫓も「各地区での維持管理が難しい」との声が聞こえるようになったことを受け、昨年度、それぞれの地域の所有物であった火の見櫓の管理を町へ移管し、今一度、火の見櫓のあり様を見直すこととしました。

歴史から学ぶもの ～そして、これから～

現在「想定外」の災害が頻発していることを考えると、どれだけ技術が進歩しても、「ライフラインが途絶え、固定電話や携帯電話が使えなくなってしまったら?」「停電してしまったら?」「防災無線のシステムが故障してしまったら?」その時どのように情報を収集し、地域の皆さんに周知するか…ということも考えておかなければなりません。その時、一番頼りになるのは、やはり「アナログ」。火の見櫓で見渡せる範囲の状況を確認し、鐘を鳴らして周囲に知らせることが一番の情報収集・伝達手段になるかと思います。

そこで、町では順次、既存の火の見櫓を塗装修繕を施しながら、いま一度、地域のシンボルとなるようにできればと考えています。そして、昔、半鐘の音を鳴らして災害を知らせていたように、訓練的に鐘を鳴らしていくことを考えています。例えば、毎年、3月と11月の火災予防週間や防災訓練時などを想定しています。

大規模災害時の最終手段として、先人からの知恵を受け継ぎ、火の見櫓の半鐘の音を次代に伝えていきたいと考えています。

問合せ先
町民安全課　☎95-1966

▲現在の火の見櫓（秋田区）